

序 文

光陰矢のごとく、九州保健福祉大学薬学部動物生命薬科学科に学芸員養成課程が設置されてから早くも6年の歳月が経ちます。この教育につきましては、たいへん多くの延岡市民の方々、宮崎県内におきまして博物館教育に携わっていらっしゃる多くの方々、また、灯台下である学内にも目を向けますと、本学科以外の多くの教員や職員の方々など、広くさまざまな方々のご理解およびご協力を賜わりながら、本学科の専任教員である山内利秋准教授を中心に、少しずつではございますが、前へ前へと進んでまいりました。その山内准教授も、もともとは本学科の専任教員ではないことを思い起こしますと、この教育は、本当に本学科の周囲の多くの方々によって成立していることに改めて気づくことができ、とても感慨深いものがございます。もちろん、この場をお借りして、心から感謝申し上げますが、あまりにも多くの方々のお蔭であることを認識しようと努めれば努めるほど、どこまで深く感謝すれば許していただけるのか量りしれません。

この教育の第一義である博物館学の教授や学芸員養成につきましては、少数ではあるものの、現に学芸員や動物園職員の輩出という実績がございますとともに、学芸員になれなかった卒業生たちにとっても、博物館学に関する知識、技能および態度は、商品の展示、企画のプレゼンテーション、製品の保管・保存、社内の後輩への教育、職務に必要な調査などに少なからず反映されていることを想像いたしますと、この目的は、達成されているものと信じております。

当初、動物のことにのみ関心をもっていた学生たちが、先輩たちの姿を見たり先輩たちから発せられる言を聞いたりして、動物園や水族館以外の博物館や学芸員にも関心の域を広げ、実際に休日に博物館を訪れ、授業から得る知識や技能を基に考えを巡らし、それを自分自身の近未来像や地域社会における役割へと結び付ける努力をしているようすを見続けますと、この教育の第二義は、学生たちの知的成長を促すことと感じております。これにより、動物に対する興味を失った動物生命薬科学科学生でさえも、知性の供給源であるはずの「大学」に誤って失望してしまうどころか、むしろ、本学の博物館学を使って、動物とは違った分野に自ら触手を伸ばすことを可能としています。大学人として、また、学科を運営する長として、たいへんありがたいこととございます。

関係する多くの方々から絶え間ないご協力を頂戴しているこの教育の発表の場であり、また、この教育1年間の集大成でもある『九州保健福祉大学 博物館学年報 4』をここにお届けいたします。まだまだ拙いところが多々ございますが、今後、なお一層のご指導ご鞭撻をお願い申し上げます、序文のことばとさせていただきます。

平成27年2月

九州保健福祉大学薬学部
動物生命薬科学科長 加藤 雅彦